
明日の傷

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日の傷

【Nコード】

N1254H

【作者名】

岡谷

【あらすじ】

おれは自分の体が嫌いだ。 実はおれの体は明日の傷がその前日に前もってできてしまうのだ。 なんでおれはこんな体に生まれてきてしまったのだろう・・・

おれは自分が大嫌いだ。もつと具体的に言うならば自分の体が大嫌いだ。何でおれはこんな体に生まれてきてしまったのだらう・・・。

おれは高校1年の普通の男子だ。何処にでもいる普通の男子だ。しかし、唯一他の人と違うところがある。

おれの体は普通の人とは全く違った体質をもっている。もったいぶっても仕方ないので言ってしまうおう。

実はおれの体は明日の傷がその前日に前もってできてしまうのだ。そんな馬鹿なと思うだらう？でも残念なことに本当のことなのだ。現に今もその体質によってできた傷がある。

左腕に何かが擦れたような擦り傷がついている。念のためにいうが今日はそんな傷ができるようなことは起こってない。これは明日できる予定の傷なのだ。まあ、予定といっても今までの実績からいうと傷ができる可能性は100%なのだが。

この体質は本当に嫌だ。だって今日は絶対に大ケガをするってわかっていても、どうすることも出来ないまま一日を過ごさなくちゃなんだぜ。そういう日はいつもビクビクしながら一日を過ごさなくてはならない。

ちなみに前日にできるケガには何故か痛みはない。しかし、まったく何も感じないわけでもない。なんて説明して良いかわからないのだけど、明らかに違和感はあるのだ。

いつからこんな体になったのかと聞かれると困る。気が付いたらこんな体になっていたのだ。もちろん親もこのことについては承知済みだ。しかし、うちの親はあまり深刻に考えていない。まったく

人ごとだと思つて。

「直人。何やつてるの？早くお風呂に入っちゃいなさい」

「うん！すぐ入る」

噂をすればなんとやらだ。

とにかくおれはこういう理由から自分の体が大嫌いなのだ。

明日は左腕のケガに注意しよう。まあ、いくら注意しても関係ないのだが。

「とりあえず午前中はケガはなし。引き続き注意を払わねば」

次の日。無事に午前の授業も終わり、おれはそんなことを思いながら昼飯を食べていた。しかし、悠長なことは言っていられない。午後は初っ端から警戒レベルをMAXにしなければならぬのだ。何故なら5時間目の授業はおれの一番嫌いな科目、体育なのだ。しかも今は、サッカーをやっている。

経験者（主にサッカー部）がリーダーとなり5チームに分かれてリーグ戦を行う。クラスの男どもは皆、毎回かなり本気になってやっている。

「おい、直人。次のサッカーよろしくな」

空になった弁当箱を片づけていたおれの肩をポンと叩きながら友彦が声をかけてきた。

友彦は親以外で唯一おれの変わった体質を知っている友人だ。ちなみに友彦とおれは同じチームだ。

「ごめん。おれ今日、あれの日だから」

「お前は女子か」

友彦がキレの良いツッコミをかました。

「しょうがないだろ？おれだってやりたいけど今日はケガをする日なんだ。午前中は何もなかったから、かなりの確率で次のサッカーでケガするんだよ」

おれはなんとも情けない声を出した。

「でもいくら気を付けたってケガはするんだろ？ だったら休んだって意味ないじゃん」

「それでも嫌なものは嫌なんだよ」

「凶星をつかれて腹が立ったおれは少しキツイ口調で言った。

「あつそ。じゃあせいぜいケガをしないように気をつけて休んでくれよ」

嫌味たっぷりのセリフを吐き捨てて友彦は去って行った。

「まったくどいつもこいつも他人事だと思いやがって」

心の中でそう呟きながらおれは机に顔を伏せた。次のサッカーの時間まではなるべく無駄な行動は控える。これにこしたことはない。

「プー……！」

体育の斉藤先生の吹いた笛の音と共にボールが勢いよく飛び跳ねた。

体育の授業でやるサッカーなんて高が知れている。1チームに約8人程度いても結局はその中の3、4人しか積極的に動いていない女子にいたってはボールが来ると怖がって避けてしまいうり様だ。

「よっしやー！」

どうやら早速、友彦が1点入れたらしい。友彦が嬉しそうにチームのみんなとハイタッチをしている。おれはベンチでその光景を一人で見ている。

やっぱり休んで正解だった。とてもじゃないがこんな日にサッカーなんて怖くて出来ない。それにもう一つ休んで良かったことがある。それは大好きな翔子ちゃんを思う存分見ていられるからだ。おれはさつきからボールの行方より相手チームにいる翔子ちゃんのことしか見ていない。教室ではずっと見ていたら怪しまれるが、こういう状況では堂々と見ていられる。

ああ、なんて可愛いのだろう。なんて美しいのだろう。翔子ちゃんに比べると他の女子はみんなゴリラか、良くてチンパンジーに見

えてくる。ああ、このままずっと翔子ちゃんのことを見ていたい。ずっと、ずっと、ずっと……。

「おい、直人。ボール行ったぞ」

友彦の叫ぶ声で我に帰ったおれは翔子ちゃんから視線を外した。

それはほんの一瞬の出来事だった。

飛んできたボールは見事におれに命中し、座っていたベンチと一緒におれは後ろへ思い切り転んだ。

左腕から痛みはすぐに来た。まるで待っていましたと言わんばかりに……。

本当につくづくこの体が嫌になる。前にも言ったと思うが、何でおれはこんな体に生まれてきてしまったのだろう。こんなのが一生続くかと思うといっそ死んでしまいたいくらいだ。

もしも、おれの最期が交通事故や何かでケガをして終わることになったらどうなるのだろうか？おれは次の日に自分が死んでしまうかわかっていながらただ待つことしかできないのだろうか？そんなの絶対に嫌だ。最悪すぎる。まるで地獄じゃないか。それだけは絶対に避けなくては……。しかし、神様は時にとても残酷なことをする。それが単なる気まぐれなのか、それとも何かの罰なのか、それはおれの知る由ではない。

それは突然のことだった。

サッカーボール激突事件から約三ヶ月ほど経ったある日の夜、自分の部屋で今日買ってきたUKロックのCDを聞いていたおれは急に胸に違和感を覚えた。しかし、この違和感の正体はすぐにわかった。ようはいつものアレだ。

今まで腕や足にならよくケガをした。顔や頭にもケガをしたことがある。でも、胸にはケガをしたことがなかった。よく考えると普

通に生活していて胸にケガをするという状況は比較的少ないことに気づく。ケガをするとするなら・・・と考えると次の二つがまず頭に浮かんだ。

まず一つ目は、ナイフなどの何か鋭利なもので傷を付けられる。そしてもう一つは、何者かに銃で撃たれる。

二番目についてはここ日本にいる限り可能性は低いだろう。でも一つ目については大いにありうることだ。

おれは明日誰かにナイフで刺されるのか？まだ肝心の傷も見えないのにそんな最悪の状況を考えてしまう。

深呼吸をして自分を落ち着かせる。もう一度深呼吸をする。もう一度、もう一度、もう一度。そして、

「・・・よし」

覚悟を決め、恐る恐る着ているＴシャツを捲っていく。ところがここでおかしなことが起こった。

Ｔシャツを上まで捲り、露わになった胸部をまじまじと見たのだが、どこにも傷らしいものがないのである。もしかしたら物凄く小さい傷かもしれないと思い、隅々までよく見たのだが、やはり何処にも傷はなかった。

「おっかしいな」

首を傾げ、もしかしたらおれの勘違いだったのかもと思い始めたのだが、依然としてあの独特な違和感は消えていなかった。

初めての展開に動揺を隠せないおれはとりあえず違和感のする胸の上に手を乗せてみた。そしてそこであることに気が付くのである。

・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・
そいつはまるで自分の存在をアピールするかのよう動いていた。
・・・ドクン、ドクン、ドクン・・・

どんどんと鼓動は早くなっていく。そしてその鼓動と比例しておれの不安もどんどん大きくなっていった。

ケガをするのは胸ではなく心臓だ。その考えが頭にはつきりと浮かんだときには鼓動の早さはピークを迎え、今にも爆発しそうな勢

いだった。

胸が無傷で心臓だけに傷がつくとはどういう状況なんだ？まったく想像が出来ない。しかし、どのような状況だとしても心臓に傷がつくということはただ事では済まないことだ。もちろん死ぬだろう。とうとうこの日が来てしまったか。おれは今までの人生を思い出していた。目から自然と涙が溢れてきた。その日の夜は一睡も出来なかった。

次の日の朝、おれはいつものように学校へ行く準備をしていた。今日死ぬというのに何で？と思うかもしれないが最期の日こそ普段通りの生活をしたいのだ。それに家にいれば親もいる。親の前でなんて死にたくないだろ？

「じゃ、行ってくるよ」

いつもは黙って家を出ていくのだが、今日だけはちゃんと喋っておきたかった。台所からお母さんが不思議そうな顔をしてこちらを覗き込んでいた。

今日死ぬという実感は全然なかった。未だにどんな死に方をするかもわからない。その状況が堪らなく怖かった。おれはいつも以上にビクビクとしていた。身を小さくし周りを常に気にしながら歩いた。授業中もケガのことばかり気になってしまい、まったく授業の内容が頭に入らなかった。

そんな様子を心配してか友彦が昼休みおれを校庭の端にあるトイレへと呼びだした。

「おい、直人。お前大丈夫かよ？今日変だぞ？」

おれは友彦に昨夜おれの身に起こった事をすべて話した。

「うそだろ？」

話を聞き終えた友彦は信じられないといった顔でおれのことを見つめた。

「嘘じゃない。今だって心臓にあの違和感があるんだ」

「でも心臓だけに傷が付くってどういう状況だよ」

「そんなの知らないよ。こっちが聞きたいくらいだ！」

そのとき隣の女子トイレから女子の声が聞こえてきた。声を聞いたところどうやら二人いるらしい。そしておれはそのなかの一人の声に聞き覚えがあった。その声は間違いなく翔子ちゃんの声だった。

「ねえねえ、翔子。今日、直人見た？」

「うん、見た見た」

二人はこちらの存在にまったく気が付いていないらしく大きな声で会話をしている。

「マジキモくない？」

「ねえ、あれはヤバイよね」

「噂だとあいつ翔子のこと好きらしいよ」

「え、本当に？マジ無理なんだけど。なんか生理的に無理」

「本当にキモイよね」

「うん。いつもキモイのに今日は特に酷かった。背中丸めて汗だらだらで、何に怯えてるのって感じ。わたしの側に近寄らないでほしい」

「あはは、本当だよな」

もうやめてくれ。頼むからそれ以上言わないでくれ。わかったから。もうわかったから。

「・・・直人」

友彦が何とも言えない顔をしている。

おれは胸の上に手を置いた。確かに今、おれの心に大きな傷があった。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1254h/>

明日の傷

2010年10月8日15時10分発行